

長谷川慶太郎著「世界大激変一次なる経済基調が定まった！」東洋経済新報社 2016年8月11日刊を読む(2)

## 1. 19世紀の大デフレが世界経済の大発展をもたらした

- (1) 実を言えば、こんにちの巨大なデフレは、人類にとっては二度目の経験である。その最初の「デフレ」の本格的な展開は、19世紀の後半、正確には1873年から1896年までの24年間、経済史の専門家たちがいう「大不況」の長期にわたる継続のなかに展開された。ヨーロッパで普仏(プロシア・フランス)戦争が終わり、次に欧州での英・独等の諸列強の軍拡戦争が始まったり、米西(アメリカ・スペイン)戦争が始まるまでの戦争のない時代は「平和と安定」の時代であり、デフレ基調であった。
- (2) この24年という「大デフレ」の結果、世界経済は大きく成長し発展を遂げた。物価はこの24年間にほぼ全体として半分になった。だが経済活動の規模とその力は一段と強まった。その最大の要因は、この時期が実は19世紀初頭、イギリスで始まった「産業革命」が、地球的な規模に拡散し、世界経済の基調に転化したという時期そのものであったからである。
- (3) イギリスで始まった「産業革命」は、その生産性の高さ、技術水準の向上、さらにまた新しい経済活動の様式の連続した誕生等々の強い力の発揮を通じて、世界全体に拡散した。
- (4) その第一歩が欧州大陸のフランス・ドイツ等々大陸諸国への波及であり、次いで大西洋を越えたアメリカ大陸への移動であった。またアジアでは日本という小国も、この新しい波を捉えて躍進した。ここで成立したのが、こんにちの「先進工業国」と呼ばれる一群の国家であり、世界経済をこんにちまで牽引していく最強の「原動力」の役割を演じてきた。
- (5) このような「産業革命」の地球的な拡散は、当然のことながら、より品質の優れた、同時にまた生産コストの安い「新製品」を次々に誕生させた。それがまた世界市場全体に拡散し、同時に世界市場の新しい姿への発展をもたらす原動力となったのである。

## 2. デフレが技術革新、自由貿易、市場開放を進めた

- (1) この時期の著しい働きを示した一例として鉄鋼生産が挙げられる。生産量は24年間で70万トンから2800万トンへ40倍も拡大した。それは同時にまた鋼材の価格がほとんど半値に下落するという供給過剰を生むと同時に、この大幅に下落した鋼材の価格が、新しい消費市場を誕生させる決定的な役割を果たした。
- (2) たとえば、この安値になった鋼材を利用した「鉄骨鉄筋コンクリート構造」という技法を生み出し、その技法によって建てられた高層建築物が、次々に先進国の大都市の様相を一変させ、巨大な人口の集積は、「大都市」を出現させた。
- (3) 安値になった鋼材を使うことによって、鉄道・船舶、さらにまた機械類が、質量ともに向上した。
- (4) 同様にこの時期に、大量の兵器を量産するという技術を生み出した。それがまた同時に軍事技術の急速な発展と、高度化を生み出し、戦争の悲惨さを一気に高める結果ともなっている。
- (5) 大不況を経験しているこの時期の最大の特徴は、「産業革命」で世界の最先端に行く、同時に

また経済活動の急速な成長の原動力となったイギリスの活躍である。イギリスは世界最強の海軍を背景にして、世界全体の秩序を維持し、平和を守っていくための、安定した「政治体制」を形成する上で、決定的な役割を演じた。

- (6) 俗に「ボックス・ブリタニカ」と呼ばれているこの時期、英国海軍に対抗し、英国海軍と海上で正面から衝突して勝利を収め得る自信のある戦力を保有している海軍は、存在しなかった。イギリスは世界最強の「海軍力」を保有すると同時に、地球的な規模で海軍の根拠地とも言うべきいくつかの要衝を自国の植民地とした。その軍事力は、広大な植民地帝国を形成する上で決定的な役割を演じたのである。
- (7) たとえば、1857年の「大反乱」を契機にして、イギリスはインドを全面的に「植民地化」し、また、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドといった英国人の移民先がそれぞれ独立して、「英連邦」を構成する。
- (8) このような流れの中で、イギリスは、世界経済全体を運営し、また安定した秩序の下に、一段の成長と発展を促進するための全ての政策の基本が、「自由貿易主義」にあるという認識に立っていた。イギリスの歴代の政権は、くり返し地球上に存在する他の国の政府に対して、「国内市場の開放」を要求し、英国海軍の強大な圧力の下に、これを次々に実現させた。

### 3. 金融・経済の一体化も進んだ

- (1) 同時にこの時期は、大陸を横断する大規模な電信網、さらにまた大西洋・太平洋と両大洋の海底に敷設される「海底電線」のネットワークを結合することによって、地球的な規模での通信、すなわち「情報」の流通するネットワークが完成した時期でもあった。
- (2) この「ネットワーク」の完成によって生まれたものは、世界全体の経済活動の同期化である。すなわち世界の主要国のどこかの金融市場で発生した「パニック」は、極めて短期間に海を越えて他の大陸の金融センターに、さらにまた海を越えて別の大陸の金融センターへと広がっていく。
- (3) これと同時に、主要な金融センター間の資金の移動が、極めて低コストで、同時にまた確実に安全に可能になった。たとえば、ロンドンとパリの間の資金のやり取りは、いわゆる「電信為替」という極めて確実な、同時にまた安全な低コスト方式を導入することによって、極めて容易になった。
- (4) 英仏海峡海底電線の開通は、このシステムを全面的に改善し、ほとんど一瞬の内に両金融センター間の資金の交流を可能にした。それがさらにまたロンドンとニューヨークの間の海底電線の開通によって、今度はイギリスとアメリカとの間の資金の交流が極めて低コストで同時に安全確実な段階へと発展した。
- (5) この「経済活動の同期化」は、国際金融市場の成立を意味している。したがってロンドンのシティは、「金本位制」と結びついて、世界全体の長期・短期の資金の集散の焦点としてクローズアップされた。世界の主要国の貿易決済に必要な資金は、ロンドンの主要銀行のそれぞれの政府が保有している「預金口座」の間の決済によって十分可能になっただけでなく、ロンドンの証券市場で起債された世界各国のインフラへの投資をもたらすための「金融商品」への投資を通じて、世界の金融活動がまさしく一点に集約されるという成果をもたらした。
- (6) それと同時に、それまで存在しなかった近代的な経済組織が誕生する。すなわち「株式会社」も近代化し、その資本金とも言うべき「株式」を取引する証券取引所が誕生する。また、国際貿易の拡大に伴って、海上保険のリスクを分散するための「損害保険」が生まれ、また人間の生死

に関わる「生命保険」を生んだ。

- (7)それらは同時に一般大衆の零細な資金を吸収するための「貯蓄機関」を誕生させ、そこで集まった資金をまとめて運用するための「債券市場」を成立させ、金融センターの大きな柱を形成することになる。
- (8)こうした新しい経済組織の誕生は、新技術の研究開発と結びついた「知的財産」を保障するための「特許制度」を誕生させた。
- (9)こうした「特許制度」の活用は、研究開発投資ないしは科学研究を爆発的に成長させ、一段と促進する役割を演じた。

#### 4. 交通、通信、情報の大転換があった

- (1)この時期は、驚くほど早いテンポで「新技術」の誕生が連続した。「電気産業」が発展していく。
- (2)ニューヨークで誕生した世界最初の「商業発電所」は、電力というエネルギーを商品として販売することによって、新しい産業を生み出す最初の第一歩となった。これ以後、世界各国の全ての地域において、「発電所」が誕生し、そこで生産された電力という二次エネルギーは、送電線・配電網を通して、個別の住宅にまで供給された。このようにエネルギーを供給するネットワークが形成され、交通機関には蒸気機関に取って代わる「電動車」を誕生させ、さらにまた工場では蒸気機関よりもはるかに簡便で出力の大きな原動力としての「電動機」を生み出した。
- (3)電力はさらに化学反応を利用することによって、電気化学工業を誕生させる。
- (4)また電信よりも、より効率の高い「電話」が実用化され、これに伴って、通信のネットワークがそれぞれ個人にまで利用可能なものとなり、また高密度の「情報の流通」が確実に展開することによって、新しい分野の知的作業を強く刺激することとなった。
- (5)それだけではない。「内燃機関」が誕生した。これは次の世紀、すなわち 20 世紀における自動車・航空機、さらにまたその他の一連の新しい産業を誕生させる原動力となった。
- (6)このような「新製品」すなわち「新産業」の誕生は、経済活動を著しく高度化させた。これによって次々に驚くほど新しい市場が誕生するという良循環が、ここで本格的に始動することになる。またこうした技術の新保について、当然のことながら、その原理を研究するための科学研究の分野でも、驚くほど新しい成果が生まれてくる。
- (7)たとえばこの時期に、医学の分野では初めて病原菌が発見され、またそれを絶滅させるために必要な「医薬品」を誕生させた。科学知識を前提にした一連の「技術」にまで大幅に医学の水準を向上させたのである。

#### 5. 音楽や活字文化の普及と高揚

- (1)安価な鉄筋、鉄骨を用いた新しい大型の建築物は、新しいサービス産業を誕生させる。
- (2)この時期まで、多くの聴衆を一堂に集めて大規模な音楽組織、すなわち交響楽団の演奏を同時に楽しむという娯楽は存在しなかった。
- (3)オーケストラと呼ばれた「交響楽団」はなかったわけではないが、彼らの聴衆は王宮に集う極少数の王侯貴族に限定され、一般大衆を相手に演奏を行うなどということは、あり得なかったのである。
- (4)この分野での驚くほどの成果は次々に誕生し、精神的な慰安、娯楽として、文化産業を一挙に

花開かせるに至った。

- (5) ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が設立され、音楽の大衆化に貢献したエジソンの蓄音機が発明され、以後円盤レコードの普及へと至る。
- (6) 同様に、人類全体にわたっての知的水準の向上、すなわち初等教育の普及は人々の識字率を向上させ、きわめて多くの「読者」を誕生させた。これがさらに大新聞を生み、出版業の興隆となり、単行本の発行部数を急増させた。
- (7) その結果、原稿料あるいは印税を原資に生活する一連の「文筆業者」が誕生する。ビクトル・ユーゴー、モーパッサン、ドストエフスキーもこの頃である。彼らは次々に、こんにちでは古典とされている一連の傑作を生み出し、これがまた多くの読者を惹きつけ、同時に社会活動に極めて強い影響を与えた。これがまた、印刷技術の急速な発展をもたらすことになった。
- (8) それまでの「平版印刷」から一挙に「輪転機」を生み出し、その結果が、新聞の大量発行を可能にした。
- (9) こうした文化水準あるいはまた読者層の大きな成長は、当然のことながら、彼らからの政治的な要求をいっそう強める上で決定的な役割を演ずることになる。
- (10) すなわち政治の民主化が強く求められ、これに応じていくことが、政治家に課せられた任務ともなっていた。すなわち、デフレの時代は民主化の実現に大きく貢献したのである。

P134 ~ 143

#### <コメント>

人類にとって、この現在の大デフレは2回目。1回目の大デフレはどのようなものであったのかを学ぶことで、ではどうしたらよいかを考えることができる。長谷川慶太郎先生の本著から大いに学びたい。

— 2016年8月2日(火) 林 明夫記 —